

Prof. A. Hillの 細胞生物学的日常

Episode 8

月 曰、飛行機の窓から外を食い入るように見ていたら、窓ガラスに鼻の穴と口のかたが白く付いてしまった。飛行機から地上や空を見るのが大好きで、毎回予約を頼む旅行エージェントの人も「いつものあれを」と言うだけで窓側を確保してくれる（言わんけど）。いつもは、窓側が取れなくて通路側から首を伸ばして一生懸命外を見ていたら、窓側の紳士（もちろん見ず知らず）が席を替わってくれた（コドモや、トホホ）。しかし、何と言われようと飛行機からの眺めはスバラシイ。知っている街や知らない国の道路や家や牧場etc.を鳥瞰するのは文句抜きに楽しい。あー、あそこにそれぞれの生活があるんだ等と妙に感じ入ってしまう。何故なのか、理由はよくわからない。ジオラマも好きだから、ミニチュア的なものに惹かれるのだろうか。きっとそういう人は他にもいると思うので（鳥瞰マニア?）、一度集まってディスカッションしてみたい。機上から雲海や空を眺めるのは、さらに好きである。雲というのは近くでは煙みたいなもんだが、遠くから見るとしっかりした建造物か地形みたいで、その気の遠くなる連なりを見ていると、ちょっと形容しがたい、ある種の感動を覚える。異国の神々の不可思議な宮殿のようでもあり、遙か彼方の未知の惑星の表面のようでもある…しばしあくせくした日々を忘れる。城達也の「はるか雲海の彼方…」という低音のナレーションが聞こえてきそう。また雲海の上で見る、日の入りや日の出の美しさも格別だ。地上では見られない息をのむ色のグラデーション。飲み過ぎて眠りこけ、見過ごすこともしばしばだが。



職業柄あちこちに出かける機会があるので飛行機にも乗れるわけだが、我がDNAにはおっちょこちょいがコードされているので一向に旅慣れず、毎回のように何かトラブルがある。乗り遅れそうになって飛行場を走るのなんて日常茶飯事で、それも早く到着しすぎてラウンジで寝ていたとか自業自得の場合が多い（日本の航空会社は親切にも、地上係員が一緒に走ってくれます。トランシーバ持った制服姿の女性とふたりで走る姿は相当情けないです）。世界中の飛行場で走っているので、見かけたら応援して欲しい。フランクフルト空港で乗り継いだときは、しなくていいのに一度入国してしまい（これは私のせいではなく、ルフトハンザのカウンターのふんぞり返ったおっさんが、間違ったことを言った）、そこからが大変で出国審査が長蛇の列だし（係官に飛行機に乗り遅れそうで急いでいるって言ったら、すごい剣幕で怒鳴られた。ドイツ語なんで何言われてるのか分からなかったけれど、お前の都合など国家の安全の前では何ほどのことかと怒ってるんでしょうね）、飛行場広いしややこしいし、ほんとうに焦った。最後に小学校の徒競走以来のダッシュをして間に合った。同行の院生があきれ顔で待っていた。そういうえばドイツに留学していたときに、訪ねてくれた親しい先生をフランクフルト空港に迎えに行ったら飛行機はとっくに着いているのに、その先生が見あたらず慌てたことがあった。身長190cmくらいの大柄な先生で、革ジャン着てサングラスして飛行場をうろついていたために、警備の軍隊にゴルゴ13と思われたか捕まっていました。

入国審査のときにパスポートが無かったこともあった。飛行機から降りてバスに乗って、そのとき手回しよくパスポートを出し、バスから降りるときには出したことをすっかり忘れていて置き忘れてきたのだ。バスは広い飛行場のどつかに行ってしまって所在が追えず、あわやそのまま回れ右で帰国という事態であった。結局かなり時間が経ってから、バスの運ちゃんが気付いてくれて私は無事イタリアで講演することができた。無事入国しても、油断は



写真では実際の色を再現できない。もっともっと神秘的なまでに美しかった。

出来ない。米国メイン州では、学会のエクスカーションで2人乗りカヌーでの川下り中に、不器用ゆえに転覆し溺れかけた（この顛末は、他の特定領域のニュースレターに書いたのでここでは詳しくは述べない）。このときは、自分のコンピュータと液晶プロジェクタのコードを繋ぐアダプターを無くし、偉い日米の先生を二人走らせるという畏れ多いこともやらかした（会場から自室まで取りに行って下さったのだが、結構距離があり、お若くないので申し訳ないことがあった）。旅先でトラブルを呼び寄せる習性は昔からで、学生のころには友達数人で貧乏旅行中に知床半島のさきっぽで車が動かなくなり、当時は携帯もないし（若者よ、携帯のない時代がついこの間まであったのだよ）、じゃんけんして負けた2人が車に残り、他がヒッチハイクで助けを呼びに行ったこと也有った。雄大な自然の眺めは素晴らしいが、だんだん日が暮れてくるし、ようやく友達がレッカーレーと一緒に戻ってきたときは「走れメロス」のごとき感動だった（戻ってこないのじゃないかと疑った私が情けない。でも今度同じことがあってもまた疑うかも知れん）。また岡山では、電話帳で温

泉宿らしきところを探して行ってみるとラブホテルになっていて、すごい田舎あたりには他に宿もなく戻るバスもなくなってしまっており、男3人で泊まつたこともある。哀れんだホテルの人が、少し離れたところで廃墟になっている元のその旅館の温泉がまだ出ているからと連れて行ってくれた。荒れ放題の廃墟の旅館の温泉というのも野趣（？）に溢れていたし、軽トラの荷台に載せられていく山道というのもスリリングで、得難い経験ではあった。新婚旅行でも、パパイヤカクテルで腹壊して七転八倒し、インド人のお医者さんにぶつとい注射を尻に打たれた（なんで尻だったのか謎）。



これは地上から。ドレスデン。ヨーロッパの古い建物は雲とよくマッチする。

しかしこうやって色々思い返してみると、私は悪運が強いことも確かだ。イタリアでパスポートをバスに置き忘れたときも、盗られもせず戻ってきたし、どんなときも命を失ったりしていないし、大きな経済的打撃も無い。イスイで無人の自動ガソリンスタンドで最後の手持ちの金を入れたのにガソリンが出てこず、文句を言う相手もおらず、ガソリン切れるなよと念佛唱えながらドイツの黒い森を走り抜けたときも何とか無事にたどり着けた。



バルセロナの裏路地

ワシントンがそんな物騒とは知らず、夜更けに暢気に歩いて（しかも人気の全く無い工事現場を抜けて）ホテルに帰ったこともあったが、同じ学会参加者が同じ夜に道でホールドアップにあったと後で聞いた。ニューヨークのチャイナタウンでひとりで中華料理を食べたときは、財布もパスポートも全部入った鞄をテーブルの下に置き忘れてホテルに帰り、しかもシャワーを浴びてから、あ、鞄忘れたとようやく思いだし（そーとーのアホや）、戻ってみると、おおジーザスクライスト、同じ場所に中身入りで鞄があった。フロリダの飛行場では、初対面の日本人の方とちょっと立ち話をしてから、では失礼とタクシー乗り場に行ったら、スーツケースを持っていないことに気付いた。戻ると、その人が困惑した顔をしてスーツケースを見ていたくれていた。ハハハ。この強運は同行者にも及ぶ。バルセロナ近郊で開催された学会に一緒に行った院生が初海外で、しかもスペインは危ないとさんざん周りに脅かされてかなり緊張していた（マドリードで某教授が、頭どつかれて気絶している間に金を取られた等々）。バルセロナに到着した日、つつがなく夕食を食べホテルの部屋に引き上げた。しかし、深夜になって彼女は自分の財布がないことに気付く。食事した店に忘れてきた！パニくった彼女は、私の部屋のドアをどんどん叩くも私は出てこない。そもそもそのはず彼女は階を間違えていた（ここで彼女の強運その1。大男がその部屋から出てきて勘違いして彼女を部屋に連れ込む、ことはなく誰も出てこなかった）。その後彼女は、意を決し独りそのレストランに向かう。方向音痴なので右往左往するもついに店発見（夜中の1時過ぎに、バルセロナの通りを日本人の若い女性がひとりで歩き回って無事というこの強運その2。しかも店もまだ開いていた。スペインの飲食店は閉まるの

お祭りで賑わうバルセロナの表通り。
有名なお祭りらしいが名前は忘れた。

が遅い。またちょうど祭りだったので人通りもまだあった）。彼女は、財布と口で言えず（スペイン語知らんし英語も出てこなかつたらしい）アワアワしながら手で四角を作つて見せたら、店の人がニヤリとしてやはり四角を作る。ちゃんと取つておいてくれたのだ（強運その3）。中身も無事。帰りにもまた道に迷つたらしいがともかくホテルにたどり着いたら、慌てて出てきたので部屋のドアが開けっ放しだつたそうな…でも何も盗られず（強運その4）。彼女の結論は、「スペインは日本よりはるかに安全だし、親切な人ばかり」。でも最期まで律儀にズボンの内側に仕込む隠し財布にお金を入れていて、帰国して電車の切符を買ふときに、ジーンズの中に手を突っ込んでお金を出していた。ということで、安全に旅をしたい人は私を連れて行くとよい。経費を負担してくれるなら、どこでも付いていきます。ただ、強運がいつ切れるか保証の限りでは無い。次あたりからだめかも…。

ところで話題が全く変わるが、「もやしもん」という漫画をご存じだろうか。息子に「菌の見える大学生が主人公の漫画がある」と教えられ何じゃそれと思っていたが、借りて読むと面白くて一気に今出ている5巻全部読んでしまった。確かに主人公の某農業大学一年生が肉眼で微生物が見えてしまう特殊能力を持っているという設定だが、別に顕微鏡のような目をしている訳ではなく、愛嬌のある姿の細菌、酵母などが「醸すぞ、醸すぞ」とか言っているのが、そいつには見えるのだ。作者がなかなかよく調べていて、発酵などの微生物学の良い勉強になります。人気漫画「動物のお医者さん」がもたらした獣医学部ブームに続き、今度は農学部人気が高まるかも（前者に比べこっちはずっとシュー

ルだが）。ちょっと女性の絵柄がくどいけれど、S.セルビジエとか説明付きで出てくる微生物たちはとてもキュートだ。小ネタの蘊蓄も色々出てきて、私は「冷凍のうどんがシコシコなのは、タピオ力を混ぜているから。」と「ミモレットチーズは、ダニで熟成させる。」というのにショックを受けた（ミモレットの皮を食べたことが何回もある）。研究に疲れたら、読んでみてほしい。

*** * 付記 1 :**ミニチュアで思い出したのが、この頃あちこちで見かける写真家・本城直季の作品。実際の街の鳥瞰写真などをまるでミニチュアを見ているかのように写す。逆転の発想というか、見るものを不思議な世界に誘います。

*** * 付記 2 :**地上からぼんやり空や雲を眺めるのも子供の頃から好きだ。要するに、かなりボーッとした人間である。でも空や雲のマニアは結構多いのだ。空の写真ばかり撮る写真家もいる。私はHABUの作品を

気に入っている。プロが撮ると、私の素人写真と比べものにならない美しさ！ネットでも見られます。
<http://www.artfarm.co.jp/habu/>画家のルネ・マグリットも雲好きで、雲だけの習作も多数あり。井上直久が描くイバラードという架空世界にも不思議な形をした雲がしばしば登場する。雲は、ある種の人間を魅了してやまない。

*** * 付記 3 :**城達也（声優・ナレーター）はもう亡くなったが、彼の伝説的な深夜FM番組「ジェットストリーム」（確かJALが提供していた）は中高生のころ、いつも聞いていた。滑らかな低音で静かに決まり文句が流れてくると、ほんとに夜の機上にいる気分がしたものだ。元祖癒し系。

*** * 付記 4 :**もやしもん、というのは色白のひよわなやつという意味ではなく、種麹屋のことである。（実は、私もこの漫画で知りました。）私は農学部出身ではないが、大昔習った平行複発酵とか出てきて懐かしかった。



左からS.セルビジエ、A.オリゼー、C.ボツリナム、O-157、A.アセチ。
ホームページから無断借用しました、すいません。アニメもやっている。